

資料 4

千七百五十年といふ所、繪畫に於て悉く不行せざるも、何程か平行するに非ざるか。音楽は十八世紀の後半より著るしき

發達を遂げたるが、繪畫も全く之に伴はずとせす。此に先んじて繪畫の大家の輩出せしかど、天才たるよりせば、音楽も獨國に隆興せる、地域の差別の明かなるも、地域の差別とはいへ、斯かるは支那に於て一國內の事と見做すべし。彼の如く接近し密邇せば事々物々相ひ影響すべく、少く隔れるを以て繪畫と音楽とを分つは、拘泥に遇へるも甚だし。且つ伊國は繪畫の隆興せしも、音楽も隆興せり、白耳義は音楽の隆興せしむ、獨國は繪畫に於て佛に劣るも、相應に振へりといふべく、佛國は音樂に於て獨に劣るも、相應に振へるのみならず、時として獨に拮抗し、之を凌駕するに及ぶ。繪畫と音楽と相ひ待てて盛衰する無しとせば、白耳義の樂オヰョスカンブレンの死せしは、同地の畫オハムスマの生まれし前にして、伊國の樂オバムストリナは同地の畫オミケラヴェロに後れて生まれし、共に羅馬に居りたり。英國の樂オバーセルの死せしは同地の畫オレノツの生まれし前にして、此と略は同時代に佛に樂オリアアリあり、獨に樂オバムツルあり。たとへ少しの差あるも、其の少しの差に拘はりて音楽の最後に發達し來れるを言ふは、理の宜しきを得

意音に至りては全く聯想に止まれど、音に於て人の歡情を惹き起す、何の音楽も能く及ばず。繪畫の自然界より劣り、音樂の自然界より優るを言ふは、條件なき事ならず。

繪畫と音樂との相ひ違ふこと、視官と聽官との相ひ違ふが如し、何人も目と耳とを混同せず、或は斯まで相ひ違へる無しとすべし。目に視る所の繪畫、耳に聽く所の音楽、亦た判然として別かる。繪畫は空間的にして音楽は時間的なりなど、根本より相ひ違ふとせらるゝの偶然ならざるが、視官も聽官も波動を感受するもの、波動の種類を異にするも、之を感受するに於て相ひ似たり。香を聞くといふは、耳にて外物を感するが如く鼻にて外物を感するよりの事なるも、鼻は舌と同類視すべく、耳と同類視すべからず。耳は目と同類と恰も舌の鼻に於けるが如し。料理に於て舌と鼻の關聯せると同様、藝術に於て耳と目の關聯せり。固より相ひ離るべからざるに非ず、砂糖の舌に於ける、麝香の鼻に於ける、各々獨立せりといふべく、繪畫は豊にて隆貴すべく、音楽は言にて隆貴

米國の侵略的徑路

米國の侵略的徑路

米國の侵略的徑路

繪畫は自然界を寫すこと多く、音楽は自然界を寫すこと少し。色彩の美を求むる、繪畫よりも自然界に於てすべし、太陽の出でんとする、若くは没せんとする、如何なる繪畫も及ばず、彷彿するだも得ず。之に反し、音楽は自然界に乏し、波の音風の音、共に極めて單純にして何等樂音を成さず、蟲の聲、鳥の聲、樂音に近きも、音樂に較ぶべくも無し、鈴蟲も、鶯も、餘りに單純なるを免れず。此點は正に繪畫及び音樂の相ひ違ふ所とせらるゝも、猶ほ一概に言ふべきに非ず。何様の繪畫も遂に自然界の美を盡すこと能はざれば、山水の美なるを稱して畫の如しといひ、人物の美なるを稱して畫の如しといふ。畫家が理想を畫ける場合、平素自然界に見ざる所を畫はし、少くとも暗示する無しとせす。繪畫の自然界に劣るを言ふは注脚を要する者、普通談話の間、繪畫を以て色彩の最上とする習はしなり。之に反し、音楽は自然界に乏し、聲音を以て人の感情を刺激する、自然界却て大に優ることあり。波の音、風の音、何等樂音を成さざるも、樂堂の樂より感動作を興へずとせず。鈴蟲の聲、鶯の聲、人を憐はすこと少からず、杜鵑の聲、或は愉快を覺えしめ、或は悲哀を覺えしむ。雁の聲は更に單純なれど、旅客をして無限の感に打たれしむ。此等は樂音として効力あるに非ず、種々の聯想を伴へるなるも、現にかく耳來に響くこと輕からず。謂ゆる空谷の

すべけれど、而も人の最大多數は耳及び目を備へ、何程か繪畫及び音樂を併せ隆貴することに堪へ。香料と味料と相ひ並びて發達し來れるが如く、繪畫と音樂と相ひ並びて發達し來り。鼻は人類に在りて漸く必要を減じ、香料は味料ほど發達せざるも、目と耳と殆ど相ひ離らず、耳は鋭敏の度獸類に劣るも、趣味を高むるに與かること多く、人と感情を交換するに於て最も力あり、爲めに音樂をして繪畫と略は五角の發達を遂げしめたり。同一のんにして視官と聽官と鋭敏を同くせざるが如く、又た練習にて鋭敏を變じ得るが如く、繪畫の多く行はるゝ社會あり、音樂の多く行はるゝ社會あり、或は初め繪畫の行はれ、後ち音樂の行はるゝあり、或は初め音樂の行はれ、後ち繪畫の行はるゝあるが、總じて繪畫と音樂と平行若くは雁行し、一方の隆盛なる時代、他の一方も幾許か隆盛なりとすべし。一々相ひ對照するを得ざれど、相ひ對照して觀察するの頗る便利なることあり、外觀の相ひ異なるを以て全く別とし取扱ふべからず。

英吉利に叛きて獨立せしより以來、最近バナマ運河沿岸約十里讓與の特權を、バナマ共和國より得たる迄に於て左の進行を見る。

米國の侵略的徑路

米國の侵略的徑路

米國の侵略的徑路

(一) 當初獨立の十三州に接續せる西部地方の開発

(二) フロリダの占有

(三) フロリダの占有

(四) テキサス州の占有

(五) オレゴン州地方の占領

(六) カリアフォルニア州の占領

(七) フラスカの買収

(八) 布哇島の合併

(九) 菲律賓、グアム、ホルトリコ、チエナイラ島の占領

(十) パナマ運河沿岸の讓受

即ち建國の當初に於ては、十三州を併せて約二十一萬三千

餘方哩に過ぎざりしもの、今日に於ては約三百五十七萬方哩

——此中には未だ菲律賓群島、コスタリコ島、グアム島、チ

エナイラ島、サントミゴ島、パナマ運河沿岸等の新領土を

含有せず——の巨大國となれり、而して其の毎回擴張の動機

は、所謂侵略的の人氣にあるを想へば、彼の米國人たる者、決

して温良平和の民に非ずして、霸氣宇内を壓し、自家獨特の

勇邁進取の氣風を臨機に發揚する底の、危險極まる列國的外

子たるを知るに足らん也。

エッチェンゲン、フンブル、フンブルなる記者は、米國紐育市に於

て刊行する週刊雜誌「アクトラック」誌上に於て、疊きに不

覺にも米國の侵略的野心の歴史を、露骨に且つ忌憚なく草を

重ぬる數回に掲載せり、其の論旨を以て輕々一雜誌の一論說

一記事と見る徒は、是れ即ち吾輩以上の仙人たらんのみ、苟

くも現代の日本國民たる者、此の一篇を讀みて、且つ西米戰

らふ。

フンブル記者は如何なる言を以て其の祖國人を鼓舞せるか

曰く、

彼れ「ウイリアム・ヘンリー・ハリス」を指す、リコン

内閣當時の國務卿にして、アラカ半島を露國より買収し、

米國領土擴張史に一大光彩に添えたる人」の資性は烈火

の如し、彼は全く理想的冒險家なりき、露領アラカ半島

を米國の版圖と爲したるは勿論、其他同時に彼れの企劃謀

計せしは、更に進んで布哇、秋馬、ヘエチ、サンボミン

ゴ、エチアム、國領たるセントジョン、セントトマス、

加之、諸國の一方面を占領するの意氣を有したり。

義勇思想の鼓吹に務めよ

國府 種 德

フンブルは其の記事を終るに臨み、左の警語を爲して曰く、
西米戰爭の結果、米國は菲律賓群島、ホルトリコ島、グア
ム島を其の領土に編入せり、其後の擴張は唯だチエナイラ
島、サモア島の一部と、パナマ地峽に開きたる運河の沿岸
一帯のみ、雖然、米國領土擴張史は、之を以て終つと爲す
あらば癡癡の臆語のみ、米國は尙ほ壯也、野心は未だ底止
すべからず、前途は大進だ遠邁也、故に過去の歴史に鑑み
將來に於ては、倍々擴張し、倍々猛進せんばある可らき。
と。吾人は暫らく此一節を録して士君子の一讀を乞ふ、而し
て其の結論は之を他日に譲ると云爾。

争以後の米國の列國の活動、帝國主義の發揮、さてはルイス
グエルト式人氣の勃興に鑑みば、坐らに戰慄せざる者はあら
ざるべし。
可見矣、滿洲鐵道中立案は提議せらる、日本人排斥案は下
院の委員會を通過す、而かも我が同胞十萬の生靈はロッキ
山以西に於ける米國の農産業を支配しつゝあるにあらざるや、
小村外相と大石正巳の問答の如きは、未だ以て對米策、對米
出稼ぎ案の真理を極めたるものにあらざる事、臺灣街頭を造
慈する十歳の鼻たらしの日本小僧にても、善く之を斷言し得
可し。
論議稍々岐路に入りたりと言ふ乎、否な、不然矣、我國の
外交、由來米國を眼中に置かざりき、是れ對米策の振はざる
所以也。換言せば我國一般の人士は「ハル」提督來航の真相
を了解せずして漫に長浦の石碑を拜し、徒らに日米兩國歴史
的の和親なるものを誦ひて、依て以て日米兩國間の權衡利害を
保持せんとす、嗚呼、此に至りて對米外交なし。
蓋し北米合衆國の狀態たる、一種獨特の政治、社會組織、
人情、人氣を有し、外交の如きも沒主義的にして、錯雜纏綿
せる事情の下に、俄然突然、飛躍的行動作意の現はるゝは、
不思議と云ふも愚か也。然るに従來我國一般の人士は、歐洲
列國の秩序井然、一絲不亂と云ふ組織と同様に考へ、一概に
泰西列國と云ふ觀念によりて其の頭腦を支配せられたる結果
全く米國を誤まり、隨て對米政策を失ふに至れり。是れ小
村一人の罪にあらず、吾國民一般が海外の事情に通曉するが
如くにして、未だ精進に通曉せざる爲めなりと斷言するに憚

竟に警吏の爲めに引き去らる。事小なりと雖も、個人主義と
公共思想との活きたる實例なり。衆目の眩る所、衆心の惑す
る所、同情は固より後者に在り。
本所に羅漢寺といふあり、五百羅漢を以て其の名を得た
り。境内に一基の石碑を建つ。元勳功臣の豐碑にもあらず、
碩學鴻儒の遺燭にもあり、猛將勇卒の墓石にもあらず、實に
一消防組頭が、火災の爲めに其の身を捐てたりといふ一の紀
念碑たるに止まる。此の如き石碑には、何人も多く注意せず
して行き過ぎるが常ならんも、此の市井に於ける義勇精神の
活きたる實例こそ、憐れににも貴とす我國國民性の發揮なれ

市に電車の車掌と争ふものあり、九段を經て築地に往かん
といひ、車掌之を許さずして、日比谷を經由せよといふ。其
の何れを探らんも、選擇は乘客に在り。されど日比谷を經て
築地に往かんは、九段を迂回するよりも短距離なり。車掌の
迂回を許さざるが、蓋し當然なり。然るを選擇が自由なりとし
て、口角沫を飛ばし、怒目瞋拳して、車掌と争ふこと多時に
及ぶ。満車の乘客に、急用を帶ぶるものあり、争論の爲め、電車
進行を止むるの久しきに堪へず、且つ乗車の衆皆其の争論者
を惡むの情を察し、覺えず身を起して、其の渡を車掌臺より
突き墜し、車掌との争一變して、兩渡相搏つ争鬪となり、
義勇思想の鼓吹に務めよ